



Title	石菴先生行状
Author(s)	中井, 天生
Citation	懷徳. 1940, 18, p. 28-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/89044">https://hdl.handle.net/11094/89044</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 石菴先生行狀

中 井 天 生



大阪の文化が大阪府學問所懷德堂諸先哲の薰陶に負ふことの多大なるはいふまでもないが、殊にその創始時代に於て最初の學主となつた石菴三宅先生の徳業を牢記せなければならぬ。學問所は先生自己の意旨の下に創立せられたのではなくて、その門下生が先生謙讓の高徳を慕ひ、先生の家塾を擴張して建設することゝなつたのだから、講舍として他に類を見ない眞價を忘れてはならない。學主として推尊せられたる薰育の功は更にもいはず、その學識に於ても、中庸錯簡説の大發見あり、殊に書道に於ては唐宋諸大家を凌ぐ雄渾卓拔なる無比の筆力を具有せられてあつた事も、萬世に誇稱するに足る者あることを認識せなければならぬ。

石菴先生の名字郷貫

先生姓は三宅名は正名字は實父、號を石菴又萬年といひ、通稱を新次郎というた。京師の人にて、寛文五年正月十九日その三條通に生れた。

祖父は道安甚左衛門と稱し、父を道悅六兵衛というた。母は田中氏である。六人兄弟にて兄を伊某伊之助或は伊兵衛というて能役者である。九歳下の弟に觀瀾名は緝明字は用晦通稱九十郎があり、其又弟に佩章名は維祺通稱總十郎がある。觀瀾と共に水府に仕へた。他の三人は不明。先生の配は岡田氏にて知順と諡せられた。二男二女を生む。長子文太郎及二女は天折し、次子が春樓にて業を繼いだ。

先生資質沈靜英敏謙讓質朴にして能く人を容る。性榮利を喜ばず、居常綿服を着し、生涯絹布を用ゐず、好みて緑衫を着て居られた。音聲が口籠りて明瞭でなかつた爲か、講説を好まれないで、坐談が得意であつた。

### 修 學 時 代

先生は幼少の時より學問に耽りて家道を顧みず、是が爲に家産を蕩盡したので、家什を賣却して、舊債を償はれたけれども、餘財が十金ばかりよりなかつたので、弟觀瀾に謂ふには、今は貧困の極になつたが、それでも短褐蔬食したならば數年を支へる事はできようとて、研究心愈堅く、兄弟机を並べて講習し、寢食を忘るゝばかりであつた。けれどもその金も盡きて益窮迫に陥つたので、相携へて江戸に來り、數年間子弟に教授してゐたが、やがて觀瀾を残して京師に歸られた。それは元祿十年に

て年三十三の時であつた。

先生も觀瀾も淺見綱齋に師事せられたが、先生はその學が朱學に純ならざる廉を以て破門せらるゝ事となつた。竹山子の覺書には、萬年先生は淺見綱齋の御門人にて、後には御見識違にて破門になり候へ共云々とあれば、破門の理由は是に相違なき筈なれど、耆舊得聞には石菴觀瀾兄弟の事を擧げて、絶交理由を觀瀾の遊蕩に歸し、石菴の破門を朱學に不純な爲としてあるが、懷德堂考には蘭洲遺稿に石菴が少年の頃妓に狎れし事を記してあるのを引きて、兄弟の事跡があまりに酷似したる所がある故耆舊得聞には兩者を取りちがへて遊蕩を觀瀾の事としたるにあらずやとて、先生少時の品行を疑つてあるのは、強ひて辯護するのではないが、破門理由としては取り難く思はれる。

### 懷德堂の創立

先生が始めて大阪に帷を下されたのは尼崎町二丁目御靈筋であつたと思はれるが、その頃中井髯菴が入門して、同門の中には三星屋武右衛門中村良齋道明寺屋吉左衛門富永芳春舟橋屋四郎右衛門長崎克之讚州金比羅の木村平十郎同平藏等があり、それ等の世話にて、正徳三年八月に安土町二丁目北側の家屋を買ひ取り、講舍多松堂を建てられ、生徒日に加はつたけれども、何か先生の本意に叶はざる者があつたので、已むを得ず閉舍して、享保四年八月に賣却し、高麗橋筋三丁目芋屋三郎右衛門の屋敷に移轉せらるゝ事となつた。此の時に備前屋吉兵衛吉田可久鴻池又四郎山中宗古等が入門した。然るに同九年三月の大阪大火に

て類焼し、書籍等残らず焼失したれば、先生は平野郷に立ち退かれたが、武右衛門等五同志の人々は尼崎町一丁目の吉左衛門の隠宅を卜して講舎を設け、始めて懷徳堂と名づけた。是は同年五月である。其歳十一月に先生を平野からお迎へした。此の時に當り八代將軍吉宗が學事を獎勵せられ、菅野彦兵衛嫌が官に請ひて學舎會輔堂を建立した折柄なれば、將軍は其事を近臣に語りて、京大阪にも此のやうな願を立つる者がないかと下問せられたから、若其人を得ば官許が得られるであらうとの旨を大島近江守よりその父古心に傳へ、古心は其友三輪執齋に謀つた處、執齋は石菴先生の徳義衆に拔でたる事を告げて、人物は可なれども、左様の事願ひ出づる者ならずと答へおきて、執齋は之を整菴に通じたので、諸同志の評議となりて、相談爰に一決したれど、老先生の許諾なからむ事を恐れて、暫く之を秘し、享保九年整菴江戸に下りて執齋と面談し、十年五月又十一年春重ねて江戸に下りて、漸く許可せらるゝ事となつたので、遂に先生を學主に推すことゝなつたが、先生は事此に及びたれば已むを得ずとせられたけれども學主の事は君子不重則不威の語を引きて堅く辭退せられたれど、強ひて學主に戴く事となつた。八月に建築が落成したから、その十月五日を以て先生始めて講席に就かれ、諸儒の日講も始まりて、學風大に興隆する運に向つた。

## 學 說

石菴先生の學は程朱を主として陸王に出入し、外朱内王の説を取つて居られた。阿波の山木善太が

先生の學を評せし語に、石菴苟も疑ふべきあれば、朱説と雖之を取らないけれども、其大本は朱説に據つてゐる。その心は、朱子の學は羅仲素李延年より出てゐるけれども、朱子は經を解けばまゝ二人の言を取らない事もある。羅李の學は楊中立から出てゐるけれども、羅李の言は必しも一々楊氏に依つてはゐない。楊子の學は程伊川から出てゐるけれども、其説伊川と異なる所がある。且朱子は終身二程を尊信して孔孟の正統としてゐるけれども、易を解けば別に本義を立て、程傳を用ゐてゐない。今朱子を學ぶ者は朱子の程子を學ぶが如くすべし、との意である。

蘭洲遺稿には其父持軒と石菴との事を述べて、かういうてある、萬年先生宅子は余の先子と親交があつたが、嘗て先子を評して善人といひ、先子も宅子を評して君子というてゐる。其相交る時、余常に侍坐してゐたが、未曾て朱陸異同の説に及ばなかつた、況や之を一にするをや。されば朱陸を一にせずとも、その善人君子たるを妨げない。苟くも徳性問學二策を以て問には自ら守り、外には事物に應接すればよいのである。余少時嘗て宅子が經書を講ずるのを聞いたが、曾て陸を援いて朱を攻むるやうな事はなかつた。是れ衆の認める所である。又記憶してゐる事に、小芝莊といふ輕俊なたちで少し學問を知つてゐる人があつて、余と與に宅子に謁した事があつたが、莊が朱子を惡しざまに言うた處、宅子は聲を厲まして叱つていうた、子は朱子を知らない、又陸をも知らない、能く自脩せよと、莊は逡巡して卻いた。余は斷乎として意うた、朱は自ら朱陸は自ら陸、並行して相悖らないのが自脩

の人である。

陸者は乾道の君子坤道の君子を言ふことを好む。余昔日萬年子に謁した時、門人富永芳春と話し居られたが、右の拳にて急に席上に一尺許を畫して、陽爻に象つていふ、是は乾道で陸氏である、又徐に五寸許を二度畫して、陰に象りていふ、是は坤道で朱子であると。蓋陸を進めて朱を退けたのである。愚今にして熟思ふに、其所謂乾道とは即一超して直に如來地に入る者、大乘禪である、坤道は讀經持律する者、小乘禪である。且此の説は九五一爻を以て言ひ、三四爻を遺してゐる、一卦を以て觀る時は、乾の惕厲は乾の乾たる所以、又上六を以て之を觀ば、陰が陽に超ゆるので不通の論である。是を以て學者を誘はば、恐くは一種の傲を増すであらう、實踐せざる者である。古語に君子は道龍變すと雖事は鼈行すとあるは之に庶いか。大底世の陸王の學を唱ふる者が見大にして高く辨ずるは甚巧であるが、行が伴はない。猶心學實學を以て一世を欺くが如き者にて、憎むべく惡むべきである。

香川太沖は曰ふ、世に石菴の事を鶴學問といふのは、首が朱子、尾が陽明で聲が仁齋に似てゐるからであると。蘭洲遺稿にも同様の事をいうて、宅子は學に宗旨なし、藥を賣りて業と爲し、喜びて醫を談ず、俗目して鶴學といふは、首は朱、尾は陸、手脚は王の如く、鳴く聲は醫に似たる故であると。是れ畢竟一時の戲言であるが、江戸より塾菴に與へし書に石菴先生を評して、今に於て先生を想見するに、學術行實他の先生に比して大に逕庭あり、天壯健遐壽を賜はゞ誠に吾が黨の幸なりと云うてあ

る。その先生の高徳を推尊せられてゐる事が知られる。

## 著 書

先生は著書を好まなかつたけれども、其經説及詩文隨筆等幾卷があつたであらうけれども、享保の大火に焼失したるもあり、又盜難にかゝりたるもあつた。即その殘稿を春樓先生が寶護して座右を離さなかつたが、或夜來客があつて、机邊の文具と共に椽側に出しておかれたのを豫ねて金子でもあらうと思ひて窺つて居た者が盗んでしまつたとの事である。

今先生の經説として存する者は中庸定本一部あるだけである。即第十六章鬼神之爲徳云を第二十四章至誠之道の下に移し、至誠之道の章を第二十三章に進め、其前は每章を送進す。第二十五章誠者自成也以下は舊の如し。舊第十五章末節、子曰父母其順矣乎を承けて、第十六章に鬼神を説くは餘りに鶻突にて連續せず、それよりも舊二十四章の末節故至誠如神から舊十六章鬼神之爲徳を承くれば甚順當なる己ならず、是にて中庸の樞認たる誠の解説を一貫する事になるからである。朱子張子が往復して論せられたる中庸の疑義には何の章といふ事は明言してゐないけれども、此の十六章前後である事は的確であると竹山子の中庸錯簡説にいうてある。先生は元伊藤仁齋の中庸發揮にも此の十六章が上に承くる所なく下に起す所がないのに疑義を挿んであるのを見て、研鑽の結果、晩年豁然として錯簡説を創始せられたのである。實に先生が千古不磨の創見なれば、竹山子は之に中庸錯簡説を附して、

之を懷德堂中庸定本と爲し、木刻して世に傳へられた。

殘存の著書には醫事傍觀一冊あり太田源之助氏の藏である。その序には享保三年江戸客中に成り此の外にはその翌年脱稿した由が記してある懷德堂に詩稿一卷あるだけである。

### 石菴先生の書法

石菴先生の書は平安朝以來擅場獨歩の名筆にて、本朝の至寶として萬世に誇示すべき者である。物徂來は豪邁にして才を負ひ、一世を蔑視して推す所罕であつたが、先生の書を賞讃して、小野道風以後の書と評してゐる。竹山の書後には先生書法の妙雄渾奇抜にして、高く唐宋を攀ち明季を睥睨す、その一點一畫人の意表に出づ、怒猊石を抉り驚蛇草に入る勢あり、孰か能く跋及せんというてゐる。その書の源流は唐宋諸家の粹を取つたとはいはれてゐるが、又かういふ話が傳へられてゐる、先生は講學の餘に書を學ぶ事を怠らず、晩年まで倦むことなかつたが、常に寺子屋から兒童の手習をしたいろはの清書などをもらひて習つて居られたさうである。心畫の淳良なる所はこの天真爛漫なる筆迹に存すと思はれたからであらう。先哲叢談などには書に工にして顔法を得たといふだけの事が書いてあるばかりで、さほど書法に重きをおいてゐないのは、經學が本務で書道は餘技だからであらうけれども、我等懷德門の後人は古先生の爲に天下に稱揚せなければならぬ。

### 雜事

懷德堂のできた時、髻菴子は先祀を堂左の齋中に奉じてゐたが、石菴先生は戴記精明の句を書して贈られたので、之を楣間に掲げた處、後又一書齋を堂の右に設けて自立と命じた時、先生が來て、齋號は實に善いというて牽牛花の詞を製し、架上の書帙を展べ、手に信せて一掃せられたのを髻菴子は寶愛して居られた。

先生は家兄が能役者であつた故か亦謠曲を善くし、鼓を撃たれた。蘭洲遺稿に宅子は嘗て謠曲一齣を作りて、自らその主しよを氣取られ、檢校中の童子に歌はせられた。宅子は小鼓を善く撃たれたので、其節奏を自分で附けられ、主しよ、從つれ、客きやく、伴つれなどは其兄伊某に定めさせられた。その時井上赤水子が居られて、諧謔がすきであつたので、伊は之と謀つて、主しよは如何なる衣を着るかといはれたら、赤水子は急に綠衫綠衫といはれた。宅子が好みて綠衫を着て居られるからである、その仕立は保衣のやうである。一同洪笑した。

春樓先生は生れて虛弱であつた故、先生は儒業を繼がせるのは覺束ないと見て、成長後の生計の爲に慮り、正徳中讚州の門人の勸に任せて、返魂丹と云ふ熊膽の丸藥を製し、門人の手にて讚州邊に販賣せしめたので、家道頗る裕になつたといふ事である。竹山子は御功者過ぎて覇術に落ち、憚乍ら流石の故先生も子を思ふ道にはかほりがないと評せられた。

蘭洲遺稿に、先人の門人である中村莊、富永吉、平野新、加藤源は皆宅子に従つた。今西正立だけ

は獨舊業を守つてゐたので、萬年術を設けて我が先生の門人を奪つたと憤つた。宅子は毎に五行説を擊破したが、正立は醫家であつて五行を信じてゐるので、毎に相問難して少しも屈しなかつた故、宅子門の諸子は正立を視ること寇讐の如くであつた。宅子五十三年の時此の輩家に邀へて壽を獻じたが、此の時先人は年七十であつたけれども壽の祝なく、八十になつて已むを得ず清水酒樓で祝うたが、唯釀飲するだけである。此のやうに薄情であつたから、先人に背いたのは最である。然るに先人は人に逢へば必宅子の事をほめて、毫も猜忌の心がなかつたというてある。想ふに門人どうしの事で、先生を罪すべきではあるまい。蘭洲先生の見も甚公平である。

病 歿

先生は享保十五年七月十六日卒す、享年六十六。河内服部川神光寺に葬つた。

贈 位

大正八年十一月天皇攝播の野に陸軍大演習を統監したまふ際、石菴先生に正五位を追贈せさせ給ふ。十年十月十六日、河内中高安村の同志壇を神光寺に設けて、贈位奉告祭を行つた。